

## 国際社会に生きる一員として

福井市明倫中学校 三年 牧田 夏美

「あ、りがとうござい、ました」

たどたどしい日本語で彼女は言った。私も「ありがとう。楽しそうに聞いてくれて。」と思った。これはアメリカの人達二十名余りが私達の明倫中学校を訪れた日の出来事である。私達吹奏楽部は全員で、彼女達を歓迎するために、「星条旗」、「いかりを上げて」、「校歌」を演奏した。アメリカの国旗である星条旗にちなんで、これらの曲を演奏することにした。校歌は、私達の明倫中学校を象徴するものとして私達のことを少しでも知ってもらおうと思い演奏した。演奏に合わせて、

生徒会執行部が元気な声で歌った。どんな反応をして彼女達は聞いてくれるかな、私はとても楽しみだった。

「パシャパシャ」、「パシャパシャ」とカメラのシャッター音が何度も会場にひびいた。彼女達が何枚も私達の写真を撮っているところだった。しかも笑顔で。曲に合わせて体を動かしている人もいた。大きな拍手の中で私達は演奏を終えた。演奏前に私が感じていた私達と彼女達の距離がぐっと縮まったような気がした。自己紹介を英語でしあつて、彼女達から名刺をもらった。授業やテストでしか使ったことのない英語を、自己紹介だけだけど生の場面で自分の伝えたいことを伝える方法として生かすことができた。私の名前を彼女はしっかりとリピートしてくれた。これもまたうれしかった。彼女達と同じ時間を過ごしたのはほんのひとときだったけれど忘れられない時間となった。

私は、英語が得意というわけではない。しかし私は確かに彼女達と分かり合えた気がする。現代は国際化の時代である。国の違いをこえて人類の仲間として互いのことをよりよく理解し合うにはどうしたらよいのだろうか。これはニュースで世界各国のことが報道されたり、世界的ニュースが一斉にどの国にも報道されたりするのを聞かたび、日ごろから私が思っている疑問である。私達が人類の仲

間として理解し合うために絶対に必要なこと、それは「あなたと会えてよかった、あなたがいてくれてよかった」という気持ち、うそのない真実の心ではないだろうか。この日の体験を通じて、自分の疑問に対しての答えを私は見つけた。そして、それは外国の人に対してだけ思う気持ちではなく、自分の周りにいるすべての人一人一人に対して自分が持つべき感謝の気持ちであると思う。

国際化社会に生きる私達は、流れるような外国語の能力も大切だとは思いますが、それよりもいっそう重要なことは、自分と同じくらいに、あるいは自分のこと以上に相手のことを大切に思う気持ちが求められていると思う。本当の意味での国際性を身につけられるよう、毎日の生活の中での出会いや人との関わりに感謝していきたい。そして、その輪を広げていきたい。